

シリア難民のいま―トルコの新聞にみる「アイラン君」後の状況―

能勢美紀

二〇一五年九月、トルコの海岸に漂着したシリア難民、アイラン君(当時三歳)の痛ましい写真が各国メディアによって報道された。特に欧州では、それまで難民を積極的に受け入れてこなかった各国政府に対して抗議の渦がわきおこり、政府は次々と緊急支援を発表する。それまでは「遠い国の出来事」として関心が高いといえなかった日本人にとっても、幼い子どもの遺体が浜辺に横たわる姿は、シリアの状況の悲惨さを知らしめるには十分だった。

しかし、「事態は何も変わらなかった」とはトルコの新聞記事の一文である(二〇一六年一月六日付 *Hürriyet* 紙)。日本ではあまり知られていないが、トルコは数の上ではシリア難民の最大の受入国である。国連難民高等弁務官事務所の発表によれば、二〇一五年七月時点でトルコには公式に登録されているだけで一八〇万人を超えるシリア難民が暮らしている。このように多数の難民を抱えるトルコにおいては、エーゲ海沿岸からギリシャを目指す難民と、彼らに乗せたボートの転覆はアイラン君の事件以前より頻繁に起きていたことであり、事件以後も後を絶たない。下の地図をみればわかるように、トルコからギリシャは「目と鼻

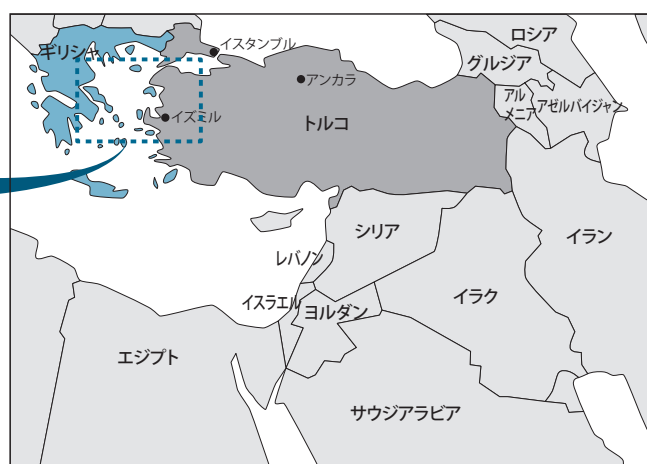
の先」である。トルコ第三の都市イズミルの南、ボドルム周辺の海岸からギリシャのコス島方面にむかうルート、また、イズミルの北、アイヴァルック周辺からレスボス島方面に向かうルートは有名だ(件のアイラン君もコス島に向かう途中で船が転覆、溺死し、ボドルムの海岸に打ち上げられた)。難民たちは簡素な木製のボートやゴムボートに救命胴衣を着けて乗り込み、ギリシャ、そしてその先の西欧諸国にたどり着くことを夢見て出航する。

「希望の旅路」(*umut yolculuğu*)と呼ばれるこのルートにおいて、ボートを漕ぐのは難民たち自身であり、転覆したボートに乗っていたシリア国籍の「船長」の一人は、「二〇〇〇ドルを払って操縦の仕方を教わった。自分もギリシャに渡るつもりだった」と供述している。また、密航に使われるボートや救命胴衣も、多くの場合、こうした密航を仲介・斡旋する業者から購入しているようで、「難民ビジネス」は大きな問題となっている(二〇一五年二月二〇日付 *Cumhuriyet* 紙)。

実は、アイラン君とその兄、そして母親が溺死したなか、唯一救助されたアイラン君の父親アブドウツラー・クルディ氏もこうした「難民ビ

ジネス」に携わる一人だったのではないかとこの疑惑がある。アイラン君が死亡した事故で、夫と二人の子供を亡くしたゼイネップ・アッパースさんは、船を操縦していたのはクルディ氏だったと証言。さらに、家族がヨーロッパに渡るための費用として一万ドルをクルディ氏に支払ったという(二〇一五年九月二日付 *Cumhuriyet* 紙)。また、この事件に関与した疑いで逮捕された二人のシリア人の裁判が二〇一六年二月、ボドルム重罪裁判所(Bodrum Agır Ceza Mahkemesi)で始まり、三月四日に結審したが、裁判のなかで、容疑者たちはクルディ氏が「オーガナイザー」だったと主張した(二〇一六年三月五日付 *Hürriyet* 紙)。

容疑者の一人は、息子の病気を治療するためにヨーロッパに渡りたかった、とも供述しており、ヨーロッパへ渡るためにクルディ氏に会い、付き合うようになったと述べている。事件の前、彼はクルディ氏からタダでヨーロッパに行かせてやる、そして、その船はクルディ氏自身が操縦するのだと聞かされていた(二〇一六年二月一日付、インターネット版 *Cumhuriyet* 紙)。真偽の程は定かではないが、これらの証言からは、被害者だと思われたクルディ氏が実は「難民ビジネス」に関わる犯罪者だったという一面が浮かび上がる。一方で、そうした「犯罪者」が、自らの命と家族の命を懸けてヨーロッパ



パ行に希望を託している姿もみることができ。クルディ氏が、難民たちから多額の金を受け取っていたのは事実かもしれない。そして、そうした彼のトルコでの生活がそれほど困窮していたわけではないことは数々の報道から明らかになっている。

しかし、彼らが「イスラム国」の攻撃からシリア（コバニ、あるいはアイン・アル・アラブ）を追われ、トルコに逃げてきたのもまた事実であり、安全とは程遠い船に乗ってヨーロッパを目指していた。彼を一方的に「実は悪人だった」「同情する価値はない」と決めつけることはできない。糾弾すべきは誰なのか。「難民ビジネス」に乗じてもうけを得ようとした密航業者だろうか。しかし、時にそうした人々は難民たち自身でもある。

同様の問題を孕んだ衝撃的な事実が、二〇一六年一月に判明した。難民が密航する際に使う「救命胴衣」は実は「殺人胴衣」であり、こうした「殺人胴衣」を作らされていた労働者たちのなかに、シリア難民の少女たちが存在していたのである（二〇一六年一月六日付、*Hürriyet*紙）。

難民たちが着用していた救命胴衣を調べたところ、それは正規品の救命胴衣の四分の一程度の価格で売られている模造品であることが発覚した。安価であるため、難民たちのほとんどが「偽物」を着用していると

いう。「偽物」であっても水に浮けばよい。しかし、この「偽物」の生地は水を通し、中に詰められているポリウレタンは水を吸収する。つまり「浮き輪」どころか「重し」になってしまふという代物だった。

事件を受けて数々の工場が捜査され、関係者の逮捕と胴衣の押収が相次いだ。押収された胴衣は最初の捜査だけで二六三着にも及ぶ。一方で、難民をとりまく環境や問題が根本的に解決されるわけではない。新聞報道によれば、二〇一五年二月だけで、トルコ海域では六六八七人のシリア人を含む八八九七人の難民が救助され、七一人が死亡している。行方不明者は数知れない（二〇一六年一月六日付、*Hürriyet*紙）。また、トルコには、イラク、アフガニスタンから逃れてきた人々も多い（国際的な支援を受ける手立てのない彼らの方が、シリア難民より状況は深刻かもしれない）。周辺国の混乱に収束の兆しが見えないなか、難民の数は増える一方である。難民の半数以上は一七歳までの子どもたちだという報道もあり、罪のない子どもたちを守ろうと必死に戦火を逃れてくる難民たちの姿が目につく（二〇一六年一月二日付、*Cumhuriyet*紙）。

彼らは欧州行に希望を託し、危険を承知で海を渡り続ける。

ただ、危険とはいえ、密航船に乗り欧州に向かうことができるのは、金銭に比較的余裕のある難民に限ら

れる。アイラン君の事件や、密航船の船長の供述からもわかるように、トルコから欧州に渡るためには多額の資金が必要である。ほとんどの難民たちはこうした金を払うことができず、不安定な身分で何年間もトルコに居続けることになる。こうした難民の不法就労や治安の悪化も問題視されており、難民を取り巻く状況は厳しい。

難民に対する支援の必要性が叫ばれる反面、実際にほとんどの難民を受け入れざるを得ないトルコの人々の心境は微妙だ。非人道的な戦争に対する怒りと難民たちへの同情がある一方で、支援の必要性だけを声高に叫び、現実的な策を出さない国際社会に対する不満、特に一方的に資金だけを渡し、トルコに難民を「押し付けようとしている」欧州に対する不満は大きい。また、先にも言及したように、大量の難民が流入すること、職を奪われるのではないかと不安、そして自爆テロを筆頭とする治安への影響を懸念する声は高まる一方である。実際に、二〇一六年一月二日に起きたイスタンブールでのテロ実行犯は、同年一月五日にイスタンブール入りし、内務省移民局（İçişleri Bakanlığı Göç İdaresi）で登録手続きをしたサウジアラビア生まれのシリア人だった（二〇一六年一月一四日付、*Cumhuriyet*紙）。

移民局での登録から自爆テロを起こすまでわずか一週間しか経っていない

ということとは、彼のトルコへの入国のそもそもの目的がテロであったと考えるのが妥当だろう。このことは、「難民とテロリストの区別をどうするか」という難民対策の難しさを浮き彫りにすると同時に、難民に対するトルコ国民の感情にも大きく影響したと思われる。

「アイラン君の写真は世界の難民問題への見方を大きく変えた」。アイラン君の事件後にトルコの新聞紙上でよく目にした一文である。多くの人々が、小さな男の子が海岸に横たわる姿に自身の家族・子供の姿を重ね、難民問題は一気に身近な問題として捉えられるようになった。しかし、その背景にある難民をめぐる状況についてはまだ身近になったとは言えない。そして冒頭で紹介したように、「事態は何も変わらなかった」。

日本のメディアからはほとんど伝わってこないシリア周辺国、特に今回はトルコにおけるシリア難民の状況について、当館で購読しているトルコの現地新聞二紙から紹介した。シリア難民について、日本で議論されているのとは別の視点から当地の状況を伝えることができていれば幸いである。同時に、難民を今も生み出している状況が変わることを祈らずにはいられない（紹介した記事をご覧ください。詳しい方は図書館にお問合せ下さい）。

（のせ みき／アジア経済研究所 図書館）